

大阪大学におけるコロナ禍による1年生への影響と 全学初年次教育 —「学問への扉」の実践—

村上正行¹

大阪大学

The Impact of the COVID-19 on Freshmen at Osaka University and the Practice of the University-Wide First Year Experience Program “A Door to Academia”

Masayuki MURAKAMI

Osaka University

1. はじめに

大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部の村上正行と申します。本日は「大阪大学におけるコロナ禍による1年生への影響と全学初年次教育—「学問への扉」の実践—」というタイトルで話題提供をさせていただきます。よろしくお願いします。

自己紹介になりますが、専門は教育工学・大学教育学で、主に教育データ分析に関する研究をしておりまして、ラーニングアナリティクス(Learning Analytics)、その中でも授業映像を対象としたマルチモーダルラーニングアナリティクス(Multi Modal Learning Analytics)などに取り組んでいます。また、ICTを活用した教育に関する研究や、今所属している教育学習支援部がFDを担当する部署ですので、FDに関する業務や研究をしています。現在、主に日本教育工学会、教育システム情報学会等で活動しています。

大阪大学に着任したのは2019年からでして、2002年から17年間は京都外国語大学に勤めておりました。2006年から初年次教育科目の「言語と平和」という全学必修科目の責任者としてコーディネートしておりましたので、この初年次教育学会でも発表させていただいたことがありますし、当時指導しておりました大学院生が投稿論文を掲載していただいたこともありまして、今回の機会を大変ありがたく思っております。

私は大阪大学の中でいろいろな立場で仕事をしておりまして、今日メインでお話しするのは全学教育推進機構の教員として運営を担当している「学問への扉」についてご紹介することになります。ただ、教育学習支援部という部門がFDや大学院生向けのプレFDを担当しているところで、かつミクロの授業単位のオンライン授業を支援してきた、という経緯があります。また、後ほど述べますけれども、オンライン授業のアンケートを全学の

¹ 大阪大学 masayuki@murakami-lab.org

業務として担当しているということもありますので、前半はコロナ禍におけるオンライン授業の支援や1年生の状況について、後半は「学問への扉」について、お話しさせていただけたらいいかなと思っています。

2. コロナ禍における1年生の現状とオンライン授業に対する評価

まず、コロナ禍における1年生の現状とオンライン授業に対する評価について、お話しさせていただきます。今までのお話にもありましたが、2020年にコロナウイルスの影響がありまして、多くの高等教育機関で急遽オンライン授業を実施することになりました。日本教育工学会で2020年6月に開催したラウンドテーブルで学会の役割を考える議論を行ったことをはじめ、日本教育工学会や教育システム情報学会の会員の方々は、各大学でオンライン授業の支援をする業務を担当されている人が多かったので、いろいろ情報共有をさせていただいてきました。

大阪大学は大規模大学ということもありまして、教育担当理事をトップとした支援対策チームを、サイバーメディアセンターと私が所属する全学教育推進機構教育学習支援部を中心に立ち上げました。私はプロジェクトチームと臨時サポートチームにおりまして、いろいろな活動をしてきました。詳細につきましては、教員システム情報学会(JSiSE)の論文誌で解説特集を2020年10月に組みまして、その論文の1つとして大阪大学の支援について書かせていただいております(村上・佐藤・大山・権藤・浦田・根岸・浦西・竹村2020)。この解説特集はJSiSEの会員以外にも公開しておりますので、ご関心がありましたら、ぜひご覧いただけたらと思います。他にも、著作権の問題やいろいろな大学の取り組みなどを紹介しております。

大阪大学の全学の支援チームとして私が取り組んでいる業務の1つが、オンライン授業に関する質問紙調査です(村上・進藤・田中2021)。2020年度に3回、今まさに2021年度の1回目をやっているところになります。今日は、この結果を簡単に紹介したいと思います。まず2020年度の前期(大阪大学は春夏学期と呼ぶ)について学年間で比較をしたところ、“オンライン授業に満足しましたか”(表1)の平均は全体で3.07(5件法)になっていますが、1年生がやはり低い結果になっていて2.9、他の2年生以上はあまり高くはないですけれども、3.2以上になっています。また、“対面授業を代替できていたと思いますか”(表2)という問いには、やはり1年生が如実に低いという結果になっていました。

次に授業形態に対する学生の好みについてです。大阪大学はオンラインの形態につい

表1 オンライン授業に対する満足度(2020年度春夏学期)

全体	1年	2年	3年	4年以上
3.07	2.90	3.24	3.27	3.25

表2 “オンライン授業が対面授業を代替できていたか”の評価(2020年度春夏学期)

	全体	1年	2年	3年	4年以上
できていた	25.7%	18.9%	35.8%	36.0%	40.2%
どちらともいえない	43.8%	49.4%	40.3%	41.1%	38.7%
できていなかった	26.8%	31.8%	23.9%	22.9%	21.1%

て、特に全学での統一方針はなく、リアルタイムかオンデマンドか、という決めがなかったこともあり、部局によっても研究科・学部によっても方針が違っていました。表3の結果から分かるように、全体として、オンデマンド型授業の好みというのが高い傾向にあります。次に、リアルタイムで映像がある、教員の映像があるタイプのものがやや高いという結果になっています。これは大阪大学の特徴かな、と思います。また、学年に着目して見ると、1年生については、ほかの学年に比べるとリアルタイムがわりと高いという結果になっています。オンライン授業に対する評価(表4)ですが、「学習しやすい」や「モチベーションを維持しやすい」というのは低めの結果になっており、特に1年生の結果がほかの学年よりも大きく低くなっています。

このような状況を鑑みて、まずは教員向けにオンライン授業に関するコンテンツの整備やFDの実施など必要であるということで、私が所属する教育学習支援部では「オンライン教育ガイド」というWebサイト(<https://www.tlsc.osaka-u.ac.jp/project/onlinelecture/top.html>)を構築して、授業をオンライン化する方法や評価する方法を10のポイントにまとめてみたものや、秋冬学期に向けて、対面とオンラインを組み合わせるハイフレックス授業を実施するためのガイドなどを提供しております。こちらにも一般に公開していますのでよろしければご覧ください。

表3 授業形態に対する学生の好み(2020年度春夏学期)

	8月	5月	平均コマ数	1年	2年	3年	4年以上
オンデマンド型授業 a) テキスト講義： 講義資料	2.87	3.12	3.5	2.81	3.05	2.78	2.93
オンデマンド型授業 b) スライド講義： スライド映像	3.43	3.57	3.0	3.39	3.57	3.59	3.13
オンデマンド型授業 c) 授業映像	3.59	3.65	1.5	3.60	3.68	3.63	3.30
リアルタイム型授業 d) スライド講義： スライド映像	2.97	2.96	1.6	2.94	2.99	2.99	3.11
リアルタイム型授業 e) 授業映像	3.30	3.17	3.1	3.37	3.20	3.23	3.24

表4 オンライン授業の学習に関する学生の評価(2020年度春夏学期)

	8月	5月	1年	2年	3年	4年以上
学習しやすい	3.07	2.95	2.87	3.23	3.39	3.31
学習効果が感じられる	2.74	2.82	2.51	3.01	3.12	3.05
モチベーションを維持しやすい	2.26	2.45	2.07	2.45	2.52	2.56
課題の量が多い	4.21	3.67	4.27	4.28	4.39	3.35
身体的に疲れる	3.56	3.20	3.71	3.46	3.49	2.96
学習の管理が難しい	3.59	3.64	3.78	3.44	3.47	3.10

表5 対面授業・オンライン授業に対する満足度(2020年度, 2021年度)

	2021 春夏	2020 秋冬	2020 春夏
授業全体	3.82	3.62	—
対面授業	3.82	3.86	—
メディア授業	3.80	3.53	3.07

全体として、1年生の評価が2年生に比べて低くなっているということですが、2020年度の1年生に関しては対面授業を一度も経験せずにオンライン授業を受講することになった、ということが原因と考えられましたので、大阪大学としては6月に新入生交流会を10回、密にならないように100名を定員にして、10回、2週間にわたって実施しました。こういったコミュニティ支援も重要、ということになると思います。

また、1年生向けに「阪大ウェルカムチャンネル」というコンテンツをWebで提供することに取り組んでいます。こちらは教育学習支援部の佐藤先生を中心に、複数のスタッフで企画しまして、学生スタッフも活躍していただき、模擬授業をはじめとしたさまざまなコンテンツをYouTubeで提供し、LINEチャンネルに登録してもらって広報する、といったことに取り組んでできました。これらの取り組みは、1年生に対してきちんとフォローしていますよ、ということを示していく活動になります。

継続的に実施しているオンライン授業に関するアンケートですが、2020年の秋冬学期と、2021年春夏学期の満足度を見てみると、だいぶ落ち着いてきたといえるかな、と思います(表5)。満足度はどの授業形態でも5件法で3.8です。2020年の後期に関しては、やはり対面授業の満足度が高いという結果になっていました。授業形態の好みについては、対面授業の方がやや高いという結果になっています。オンライン授業については、阪大生はオンデマンドのほうがずっといい結果になっています。2021年に学生に「どう？対面授業？」と聞いてみたら、「教員が言ってることを早送りできへん」みたいなことを言っていました。阪大生は、オンデマンド授業を大体倍速で授業を見ているというようなことだそうでした。「オンデマンドのほうが都合いいです」という学生も多いようです。もちろん、これは学生によりますが、やはり全体としては、オンデマンドと対面授業が両方あったらいいかな、みたいな感じのようです。アンケートの結果からもわかるように、オンライン授業についても全体的な評価もかなり上がってきています。大体、今、対面授業とオンライン授業が半々くらいなのですが、教員も学生もいろいろな形態の教育に慣れてきているのかな、と思います。

大阪大学では「ブレンデッド教育」を打ち出しておりまして、コロナ後の大学において、今後いろいろな形態の授業を展開していくことが求められる、ということになります。

3. 大阪大学における全学初年次教育「学問への扉」の実践

ここから大阪大学の初年次教育「学問への扉」について紹介させていただきたいと思います。大阪大学では2019年度から新たな形で、少人数のセミナー型初年次導入科目「学問への扉」を全学必修科目として新設しました。主体的で創造的な学び、異分野の学生とのコラボレーション、アカデミック・スキルズ、などを含んだ大学における学びの基礎科

目として開講しています。「学問への扉」という科目名にもありますが、学生に研究への興味関心を持ってもらいたい、ということで、こういった3つの学習目標・学習効果を狙って提供するということになりました(村上・安部・中・和嶋・杉山・宇野 2020)。

開講状況ですが、春夏学期のいわゆる半期セメスター科目になっていて、大阪大学1年生は約3,400名いるのですが、全員が受けられるようにということで、定員が17名の少人数クラスで約250クラス開講しています。授業は7つの時間帯にあるのですが、学生は2つの時間帯から授業を選ぶことになります。例えば文学部だと月曜5限、水曜2限から選ぶ、というような形です。そうすると各曜日に35クラスぐらいあるので、約70クラスから第1希望～第8希望まで選んでKOANという学務情報システムに登録してもらいます。私は、この「学問への扉」の全体の責任者を今年度から務めています。

2019年は対面で実施しましたが、2020年は完全オンラインとなり、2021年については、最初2週間は対面でできたのですが、緊急事態宣言で大阪府からの要請もあったのでオンラインになりまして、6月中旬からは対面かオンラインを教員・学生の相談のもと選ぶ、ということになりました。ハイフレックス型でやっている授業が多い、といった状況になっています。

研修会を毎年やっておりまして、2020年度に関しては完全オンラインでしたので、アンケートの結果などの紹介、オンラインにおけるアクティブラーニングの方法についての研修をオンデマンド映像で事前に見ていただき、事例報告として2人の先生に授業実践について紹介していただきました。また、2019年には「学問への扉」の授業を20クラスほど観察して、授業実践のポイントをまとめるというようなことをやっています。また多くの先生が「学問への扉」の授業を担当されるのですが、普段学部生に授業する機会がない先生も多いため、どんなふうに授業をしていいか分からないといった質問や、学部生に教えるときにこういったところに気をつけていただきたいという注意点についてまとめたガイドを作成しています。アクティブラーニングをあまり経験したことのない先生も多いので、このガイドでは、こんなふうにアクティブラーニングできますよということも紹介しています。

いろいろな授業の話をお伺いしているのですが、ここでは2020年度の研修会で事例紹介していただいた授業を紹介します。人間科学研究科の宮前先生は「エスノグラフィを書く」という授業をされています。当初、フィールドワークを実施する予定だったそうですが、コロナの影響でフィールドワークができないということもありまして、自分のコロナの自粛生活をオートエスノグラフィ的に書いてもらうという取り組みをやっておられまして、この文集はWebページに公開されています。先日、対面の授業を見学させていただいたのですが、非常に興味深い授業だなと思いました。

また、高等教育・入試研究開発センターの和嶋先生は「データの見方」というタイトルで、2020年のコロナの状況がどんな風にデータとして見ることができるのか、ということについて実習を通して取り組んでいく、という内容です。これはいわゆる理系の科目になりますが、文系の学生も受講されていて、非常に分かりやすく興味深い授業を展開された、ということで、非常に好評な授業ということになっています。

私自身は、2020年度から授業を担当しており、「ポップカルチャーと現代社会」という授業では、メディアリテラシーやネットメディアについて扱っています。授業デザインで

すが、2020年度は学生に聞いてみると、やはりディスカッションをしたいという意見も多かったので、15分説明して、15分グループに分かれて議論して、10分で全体共有するみたいな取り組みを2回繰り返すというような形でやっていました。授業中は基本的に学生同士の議論を中心にして、授業に応じて事前課題とかコメントを書くようにする、といった取り組みを取り入れています。また、毎回学んだこと、感想などの振り返りコメントを書いてもらって次の授業の最初に紹介する、といった取り組みもしています。あとは、オンラインということもあって、交通費もかからないため、気軽に知り合いの方にゲスト講義をお願いしていました。授業の課題としては、大阪大学の教員に対してインタビュー記事を作成してもらって公開したり、グループプレゼンをやったりしました。

このような形で、文系・理系を越えて学生に興味あるテーマについて学んでもらいたいという授業になりますが、その評価として、アンケートを毎年やっており、70%前後の学生が回答してくれています。2020年度までのアンケート結果は発表してきましたが(村上・安部・中・杉山・宇野 2021)、2021年度のアンケートは先日終了したところなので、ここではじめてご紹介します。満足度については、5件法で、2019年度4.09、2020年度4.37、2021年度が4.39ということで、年々向上しています。研究の面白さについても、6件法で1年目が4.58でしたが、2年目4.89、3年目4.91とあがっているということになっています。

学生の意識に関する結果(図1)も思った以上に上がっておりまして、おおむね良い評価を得られているということになっています。15、16番のコミュニケーションに関しては2020年度に下がっていたのですが、2021年度に上がっておりまして、対面の有効性とかもあったのかなというふうに思います。

また、自分で能力が向上したと思うかどうかということを学生に聞いています(図2)。いわゆる主観的な評価になりますけれども、こちらもおおむね上がっている結果になっています。真ん中のリーダーシップ、プレゼンテーション、コミュニケーションなどはやはり2020年度は減少していたんですけども、2021年度は上がっているという結果になっ

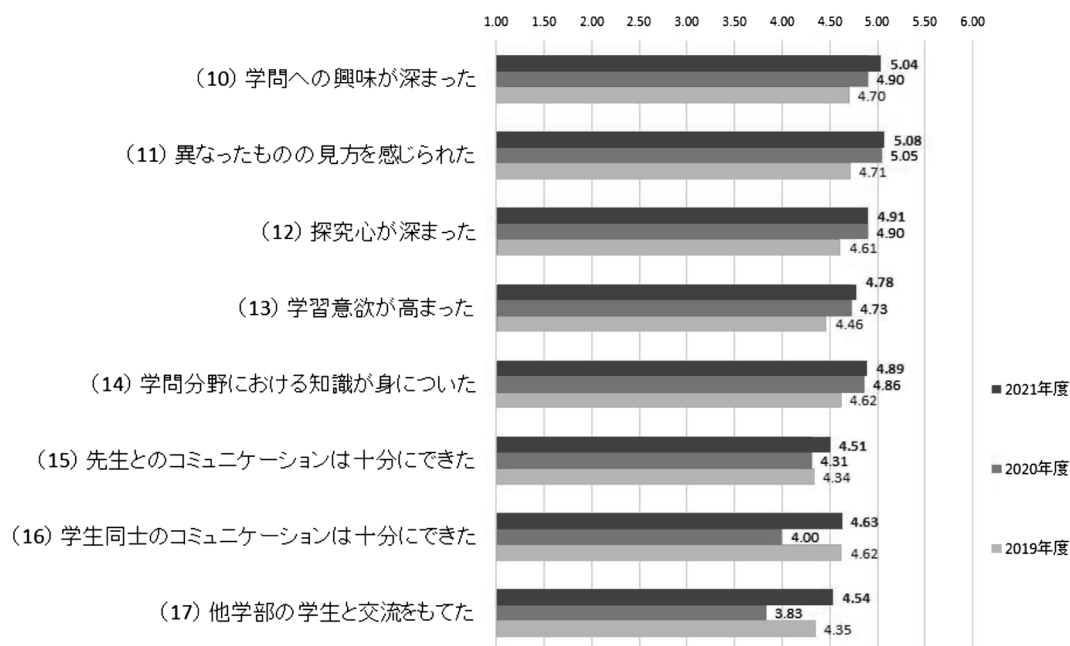


図1 「学問への扉」受講における学生の意識に関するアンケート結果

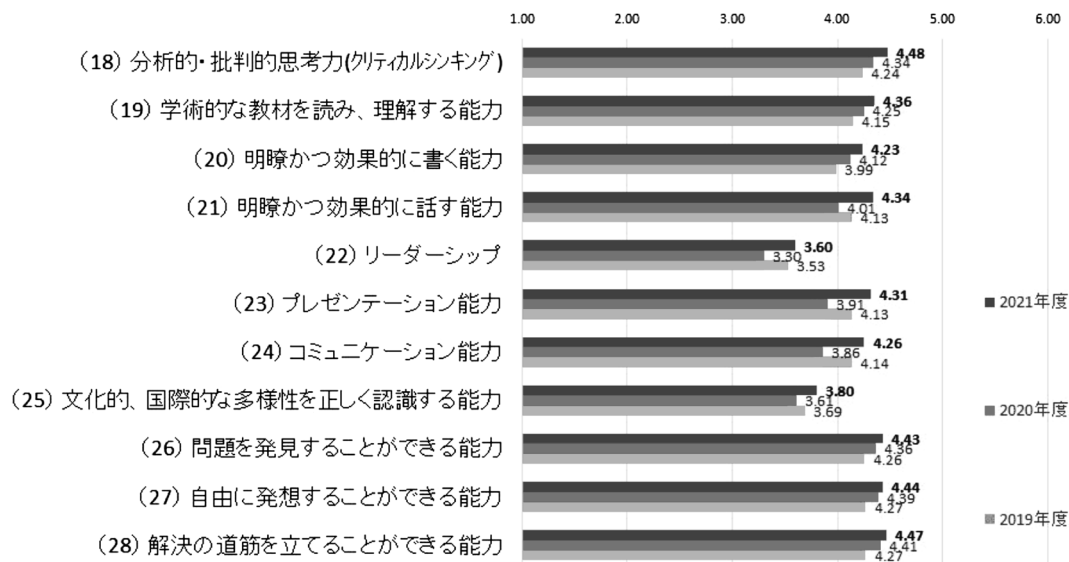


図2 「学問への扉」受講における学生の能力向上に関するアンケート結果

ています。ちなみに大阪大学はどんな質問紙をやってもリーダーシップが低く出るということで、もうちょっとリーダーシップを持ってほしいなと思うところではあります。

簡単な考察になりますが、満足度は年々向上しているということになります。2020年度は基本オンラインで、1年生はだいたい16コマぐらい履修しているのですが、そのうち6割ぐらいがオンデマンド型授業だったそうです。また、リアルタイム授業でも学生同士の交流が少ないということもあったようです。この「学問への扉」はアクティブラーニングでやっていますので、学生が、教員や学生同士の交流を求めているということで、満足度が高くなったのかなと考えております。さらに、2021年度については、対面・オンラインが混在している状況でも、十分学生と教員の交流はできていたのかなというふうに推測しています。また研究の面白さとか学問への興味や学習意欲などの評価も向上しているという結果になっていると思います。

能力についても年々上昇していて、プレゼンテーションやコミュニケーション能力の向上について2020年度は低くなっていましたけれども、また上昇しているということで、プレゼンテーションやコミュニケーション能力の向上についてはやっぱり対面の有効性といえますか、オンラインではちょっと寄与しにくいのかなと思います。これはもちろん主観評価ですので一概には言いきれませんが、対面の有効性が推測されるのかなと思います。オンライン授業の状況の中でも「学問への扉」の有効性というのは一定の評価を得ることができたのかなというふうに思います。

大阪大学の現状として、コロナ禍における1年生の現状と「学問への扉」のお話をさせていただきました。今後、やはりキャンパスの意味、対面授業の意味みたいなのを問い直す必要も出てくると思います。授業は、ある程度オンラインでもできるのかなと思いますが、大学生活、キャンパスライフを全体としてどうやって支援していくか、ということこれから検討していく必要があると思います。私からの話題提供は以上です。ありがとうございました。

参考文献

- 村上正行・佐藤浩章・大山牧子・権藤千恵・浦田 悠・根岸千悠・浦西友樹・竹村治雄(2020)「大阪大学におけるメディア授業実施に関する全学的な支援体制の整備と新入生支援の取り組み」『教育システム情報学会誌』, 37(4), 276-285.
- 村上正行・進藤修一・田中敏宏(2021)「大阪大学におけるオンライン授業に対する教員・学生の評価」『日本教育工学会 2021 年春季全国大会講演論文集』, 191-192.
- 村上正行・安部有紀子・中 美緒・和嶋雄一郎・杉山清寛・宇野勝博(2020)「大阪大学における全学初年次教育「学問への扉」の実践と評価」『第 26 回大学教育研究フォーラム発表論文集』, p.210.
- 村上正行・安部有紀子・中 美緒・杉山清寛・宇野勝博(2021)「大阪大学における全学初年次教育「学問への扉」のオンライン化とその影響」『第 27 回大学教育研究フォーラム発表論文集』, p.149.